THE FUKUOKA
ASIAN CULTURE PRIZES

第12回
福岡アジア文化賞

THE 12th
FUKUOKA ASIAN CULTURE PRIZES

2001

大　　賞
GRAND PRIZE

ムハマド・ユヌス	**Muhammad YUNUS**
グラミン銀行総裁	**Managing Director, Grameen Bank**
１９４０年６月２８日生	**Born June 28, 1940**
バングラデシュ	**Bangladesh**

略　歴

1940　チッタゴン市に生まれる
1957-61　ダッカ大学に学び、同大学大学院を修了
1965-66　フルブライト交流計画奨学生としてコロラド大学で学ぶ
1966-69　ヴァンダービルト大学研究教育奨学金を得て同大学で学ぶ
1969-72　ミドルテネシー州立大学経済学部助教授
1970　ヴァンダービルト大学博士号（経済学）取得
1972-89　チッタゴン大学経済学科教授兼学科長
1976-83　村落金融プロジェクト研究代表者
1983-　グラミン銀行創設、総裁となる
1984　ラモン・マグサイサイ賞
1987　独立記念日賞（バングラデシュ文官最高栄誉賞）
1994　世界食糧賞
1995-99　CGAP（世界銀行最貧層援助顧問団政策助言会議）初代議長
1996(4~6月) バングラデシュ暫定内閣閣僚
1998　尾崎咢堂賞

・世界各地の諸学術機関より名誉博士号を授与される
・世界各地の諸機構の理事、顧問助言者を務める
・バングラデシュの貧困と開発をめぐる多様な問題に取り組むため、グラミン銀行のほかにも多くの企業等を設立

主な著作

『農村開発—優先順位の変更ではなく、新しい開発戦略の提言』1979
『バングラデシュにおけるグラミン銀行プロジェクト—貧困を照準とする農村開発計画』1982
『ジョリモンとその仲間たち—貧困の顔々』（編著），ベンガル語版，1982（英語訳：1984）
『農村貧困層のための集団を基盤とする貯蓄と信用貸し』1986
『自己雇用のための信用貸し—ひとつの基本的人権』1987
『グラミン銀行—経験と提言』1992
『望みさえすれば、環境均衡型貧困無縁社会の創出は可能』1994
『資本主義は富裕層の侍女でなければならないのか』1994
『私の理解するグラミン銀行』1994
『貧困なき社会の創出にむかって』1995
『貧困のない世界へ』（共著），フランス語版，J・C・ラット出版社，パリ，1997
（英語訳：『貧者のための銀行家』ユニバーシティ出版社，ダッカ，1998）
（邦訳：『ムハマド・ユヌス自伝』猪熊弘子訳，早川書房，東京，1998）
［その他、イタリア語、スペイン語、トルコ語、ドイツ語、オランダ語、ポルトガル語、グジャラート語、中国語訳有り］

※出版社・出版地の記載のないものは、すべてグラミン銀行（在ダッカ）より出版

贈賞理由

ムハマド・ユヌス氏は、独自の発想をもとにグラミン（村落）銀行を創設して、貧困根絶活動に新たな局面を切り拓いた、アジアのみでなく世界を代表する実践的な経済学者である。

ユヌス氏は、1940年にチッタゴン市で生まれ、ダッカ大学大学院を修了後、アメリカに留学、1969年にミドルテネシー州立大学助教授に就任した。しかし独立を達成した祖国の再建に貢献するため、1972年に帰国。国家計画委員会経済部会副部会長に迎えられたが、志との違いの大きさに活動の場を見いだせず職を辞し、32歳の若さで故郷のチッタゴン大学経済学科教授兼学科長に就任した。

1974年、サイクロンの来襲による多大な犠牲とそれにつづく飢きん、そして貧困と闘いつつも、わずかな元手すらも高利貸しに依存せざるを得ない農村女性を取り巻く悲惨な状況から受けた衝撃を契機に、学究生活に閉じこもることなく貧困根絶という実践活動に身を投じていった。その動機は、自らが専攻してきた経済学への深い疑問とともに、「貧困の悪循環」からの解放を語るさまざまな学説が、現実に対して無力であるとの自覚であった。

ユヌス氏は、バングラデシュの貧しい農村にあって、さらに貧しさがしわ寄せされる女性を対象に、1976年に無担保小口貸付というリスクに満ちたまったく新しい試みを開始する。その試行を通じて見いだされたものは、貸付を受けた女性たちが、創意工夫を重ねて新たな収入源さらには小ビジネスを創出し、期日には責任をもって完済する姿であった。これが貧困根絶につながることを確信した同氏は、1983年にグラミン銀行を創設する。同銀行は現在では、女性ひいてはその家族の貧困からの脱却と自立を支える組織として、国内村落の過半にあたる約４万の村々で、約240万人を対象に無担保小口貸付を行うまでに成長した。その活動はマイクロ・クレジットの名のもとに国際的にも広がり、それを範としたマイクロ・クレジット・バンクが60か国以上の国々で設立されるに至っている。

「貧困こそが人類のあらゆる努力を汚し、侮辱するもの」「貧しくても人は自助努力をし、責任感をもって行動する」という強い信念、そして問題の所在を的確に見抜く経済学者としての洞察力、これらを同時にあわせもつユヌス氏の一連の創造的な活動は、開発と貧困根絶に挑戦する有力なモデルとして世界に大きな影響を与え、まさしく「福岡アジア文化賞―大賞」にふさわしい優れた業績である。

学術研究賞
ACADEMIC PRIZE

速水　佑次郎（はやみ　ゆうじろう）	**HAYAMI Yujiro**
国際開発高等教育機構大学院 プログラムディレクター	**Director, Foundation for Advanced Studies on International Development Graduate Program**
政策研究大学院大学教授	**Professor, National Graduate Institute for Policy Studies**
１９３２年１１月２６日生	**Born November 26, 1932**
日　　本	**Japan**

略　歴

1932	東京都に生まれる
1956	東京大学教養学部教養学科卒業
1956 - 66	農林水産省農業総合研究所研究員
1957 - 60	アイオワ州立大学経済社会学部大学院留学、農業経済学博士号取得
1966 - 86	東京都立大学経済学部助教授、教授
1968 - 70	ミネソタ大学客員准教授
1973	日本経済新聞経済図書文化賞
1974 - 76	フィリピン国際稲研究所上席研究員
1986 - 2000	青山学院大学国際政治経済学部教授
1987	総合研究開発機構（NIRA）政策研究東畑記念賞
1991	イェール大学経済成長センター客員教授
	アメリカ農業経済学会名誉会員
1995 - 96	コーネル大学客員教授
1996	日本経済新聞経済図書文化賞
1997	世界農業経済学会名誉会員
1999	紫綬褒章
2000 -	国際開発高等教育機構（FASID）大学院プログラムディレクター
	および政策研究大学院大学教授

主な著作（英語で出版）

『農業発展—国際展望』（共著），ジョンズ・ホプキンス大学出版，アメリカ，1971
（改訂版：1985）［アラビア語、中国語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語訳出版］
『小農経済の分析—フィリピンの稲作農村』フィリピン国際稲研究所，1978
『岐路に立つアジアの農村経済』（共著），東京大学出版会およびジョンズ・ホプキンス大学出版，1981［インドネシア語訳出版］
『包囲される日本農業—農業政策の政治経済』マクミラン出版社，イギリス，1988［中国語訳出版］
『商業と工業の農業的起源—インドネシアの農民市場の研究』（共著），セント・マーチン出版社（アメリカ）およびマクミラン出版社，1993
『契約選択の経済学—農村からの視点』（共著），クラレンドン出版社（イギリス）およびオックスフォード大学出版（アメリカ），1993
『開発経済学—諸国民の貧困と富』クラレンドン出版社，イギリス・アメリカ，1997（第2版：オックスフォード大学出版，イギリス，2001）［中国語訳近刊］
『東アジア経済発展の制度的基盤』（共著），マクミラン出版社およびセント・マーチン出版社，1998
『稲作農村物語—フィリピンにおける緑の革命の30年』（共著），バーネス＆ノーブル出版社（アメリカ）およびマクミラン出版社，フィリピン国際稲研究所，2000
『経済開発における共同体と市場』（共編），オックスフォード大学出版，2001

主な著作（日本語で出版）

『日本農業の成長過程』創文社，東京，1973
『農業経済論』岩波書店，東京，1986
『開発経済学—諸国民の貧困と富』創文社，1995（新版：2000）

贈賞理由

速水佑次郎氏は、フィリピンなどアジア諸国での四半世紀に及ぶ地道な農村調査と卓越した理論構築力を結びつけて、従来の研究を大きく塗り替える新しい開発経済学を構築した、アジアを代表する経済学者である。

速水氏は、1956年東京大学を卒業後、アイオワ州立大学で博士号を取得。その後、イネの高収量品種（HYV）の開発・普及を柱とする「緑の革命」の推進機関として、世界的に有名なフィリピン国際稲研究所（IRRI）での共同研究を出発点に、ルソン島の一村落を選んで、長年にわたり農村の経済や農民の行動の変化をつぶさに調べ続けてきた。それと並行して、途上国における貧困問題の解決をめざす理論の体系化にも努め、「市場・国家・共同体」を軸とする、「速水開発経済学」とも称される独自の学問体系を構築した。

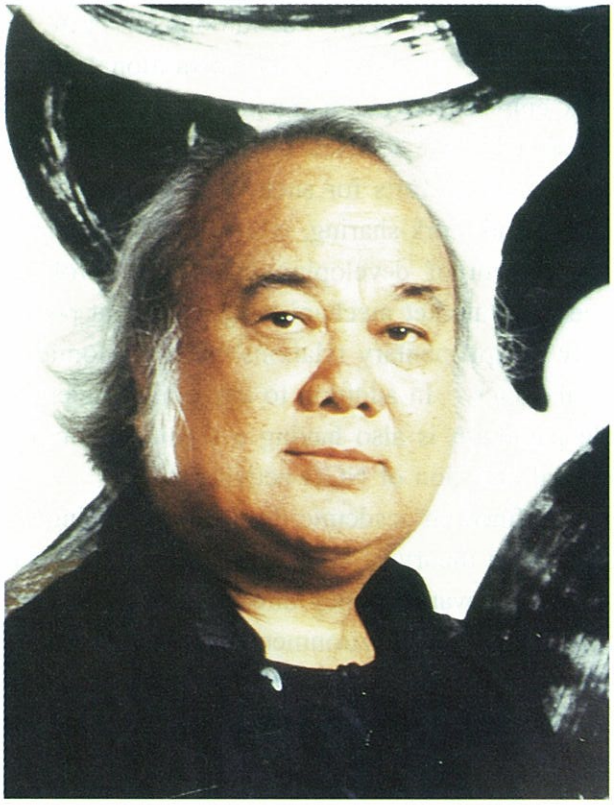
経済学は現在、大きな曲がり角に立っている。市場万能主義を続けてきた欧米諸国が新たな所得の不平等や環境問題に直面し、国家主導の工業化を進めてきた日本、韓国などの東アジア型の工業化モデルが批判にさらされているのは、従来の研究や政策がもっぱら市場の働きや政府の政策にのみ関心を向けてきたからであった。

そこで速水氏は、まず各国・地域の現状を「経済サブシステム」と「文化・制度サブシステム」の２つに分け、経済のみならず地域に固有の文化価値体系や社会組織を重視する立場をとった。具体的には、アジア諸国の農村に見られる人と人との間の「信頼関係」や、田植え・刈り取り・除草作業などにおける共同行動に着目し、所得の「分けあい」や「雇いあい」といった村落の慣行が、途上国の経済発展に果たす役割を積極的に評価した。そして市場の働き、政府の政策、共同体の人間関係の３つが、経済発展において相互にどのような補完関係をもち得るかを、アジア農村社会での経験に照らしつつ追究した。同氏のスケールの大きい新しいパラダイムは、今日世界の学界の注目を集めただけでなく、世界銀行の方針見直しや、NGO活動の理論的方向づけにも大きな影響を与えている。

このように速水氏は、アジア地域の経験を途上国全般の経済開発理論へと拡大し適用できるような学問体系に組み替えるとともに、途上国のみならず先進国も抱える所得分配の不平等化と環境問題に対する解決方法に画期的な指針を与えるなど、世界各地の開発・発展の政策研究に大きく貢献し、その業績はまさしく「福岡アジア文化賞―学術研究賞」にふさわしいといえる。

芸術・文化賞
ARTS AND CULTURE PRIZE

タワン・ダッチャニー	**Thawan DUCHANEE**
画　家	**Painter**
１９３９年９月２７日生	**Born September 27, 1939**
タ　イ	**Thailand**



略　歴

1939	チエンラーイに生まれる
1954 - 57	バンコク、ポーチャーン美術工芸学校で学ぶ
1956	バンコク、第７回全国美術展に初入選
1958 - 63	シンラパーコーン大学絵画彫刻版画学部で学ぶ
1962	タイ観光協会主催の公募展で金賞
1964 - 68	オランダに留学、アムステルダムの国立芸術アカデミーで学ぶ 以後、西ドイツ（1972, 74, 85, 86, 91）、イギリス（1975）、アメリカ（1975, 99）、イスラエル（1977）、スイス（1978）に滞在作家として招聘
1971	バンコクで学生たちによる展覧会襲撃事件
1983 - 97	タイ国内の銀行などに壁画制作
1984	チエンラーイに広大な敷地を有する「精神と芸術村—現代自然史民族博物館」設計・建設 以後、オーストラリア（1993）、トルコ（1994）、オーストリア（1999）に滞在作家として招聘
2001	バンコクのUCOMビル内にタワン・ダッチャニー美術館が開館

主な展覧会

1961	初個展（スワン・パッカード宮殿，バンコク）
1964	個展（バンカピ・ギャラリー，バンコク）
1967	個展（ステデリック美術館，アムステルダム）
1968	壁画制作、個展（キリスト教学生会館，バンコク）
1971	個展（ゲーテ・インスティテュート，バンコク）
1972	個展（ギャラリー・ダウンタウン・ハワイ，ホノルル）
1973	個展（ブリティッシュ・カウンシル，バンコク）
1977	個展（イスラエル美術館，エルサレム）
1989	出品「タイ現代スピリチュアル・アート展」 （ゲーテ・インスティテュート，サンフランシスコ）
1990	個展（福岡市美術館） 個展（国際交流基金アセアン文化センター，東京）
1993	滞在制作、個展（メルボルン大学）
2000	出品「アセアン12人の芸術家展」（国立美術館，クアラルンプール）

主な作品

1961	「病めるメオ族のための祈り」（油彩，ゲーテ・インスティテュート所蔵，バンコク）
1964	「崇拝」（油彩，福岡アジア美術館所蔵）
1974 - 76	「仏伝図」（油彩，タイ国立美術館所蔵）

※「略歴」「主な展覧会」については、タワン・ダッチャニー氏の提出資料に基づき作成

贈賞理由

タワン・ダッチャニー氏は、タイのみならず、アジアそして世界を舞台に活躍し、タイ仏教に基づく独特の仏教観に根ざした躍動感あふれる独創的な画風で、専門家をはじめ幅広い大衆的な支持を獲得している、アジアを代表する画家である。

タワン氏は、1939年タイ北部のチエンラーイに生まれ、シンラパーコーン大学でタイ近代美術の父と言われたイタリア人画家コッラード・フェローチ（タイ名シンラパ・ビラスィー）氏に学んだ。1964年から68年までオランダに留学、西欧美術の伝統と技法を深く学んだ同氏は、帰国後、タイ人としてのアイデンティティを真剣につきつめていく。そして、現代に生きる人間の奥に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを、宗教との関わりのなかで問いかけ、見つめ直し、それらをタイの伝統的な仏教美術と仏教思想を源泉としながら、黒を基調とする衝撃的な手法で表現した。獣や昆虫と合体したグロテスクでエロティックな人体と、聖者としての仏がからみあう迫力ある作風は、多くの人々に衝撃を与え、一躍その名が広まるが、一方で、同氏の表現は仏教の冒瀆（ぼうとく）と激しく批判され、展覧会襲撃事件に発展するほどの反発を生み出した。しかし、「神話に生命を与えた」と同氏の芸術を理解し、一貫して擁護したタイの代表的知識人ククリット・プラモート氏をはじめ、次第に評価が高まり、同氏の絵画の斬新さと独創性は、広く支持されていった。

タワン氏は、1974年の西ドイツとイギリスを皮切りに、欧米、アジア、オーストラリア各地で精力的に個展を開催、大きな反響を呼び、その評価と名声を確固たるものとした。1980年代から1990年代にかけては、大壁画を数多く手がけ、大衆的な人気も獲得した。同氏は絵画にとどまらず、伝統的なタイの仏教建築様式に独自の創造性を加えた建築や意匠の彫刻にも能力を発揮するなど、多方面に優れた業績を残している。

その創作へのあくなき執念とエネルギー、そして豊かな能力を備えもつタワン氏は、現代アジア美術界の巨匠とも呼ぶべき存在であり、アジア独自の芸術表現を築きあげ、世界に衝撃を与えた力量と業績は、まさしく「福岡アジア文化賞—芸術・文化賞」にふさわしいといえる。

芸術・文化賞
ARTS AND CULTURE PRIZE

マリルー・ディアス＝アバヤ	**Marilou DIAZ-ABAYA**
映画監督	**Film Director**
１９５５年３月３０日生	**Born March 30, 1955**
フィリピン	**Philippines**

略　歴

1955	ケソン市に生まれる
1976	アサンプション・カレッジ教養学部卒業（コミュニケーション・アート専攻）
1977	ロサンゼルス、ロヨラ・メリーマウント大学映画・テレビ学科修士号取得
1978	ロンドン・インターナショナル・フィルム・スクールに学ぶ
1980	長編第一作『鎖』を発表 長編第二作『ブルータル／暴行』メトロ・マニラ映画祭最優秀監督賞
1981	リノ・ブロッカ監督、イシュマエル・ベルナール監督とフィリピン・フィルムディレクターズ・ギルド（KDPP）結成
1982-	アテネオ・デ・マニラ大学コミュニケーション・アート学部映画講師
1983	『モラル』ロンドン国際映画祭出品
1984	『カルナル／愛の不条理』フィリピン・フィルム・アカデミー賞最優秀監督賞、ファマス（フィリピン映画芸術科学アカデミー）賞最優秀監督賞
1986-97	テレビ政治討論番組「パブリック・フォーラム」監督
1987-90	テレビニュース番組「シック・オクロック・ニュース」をはじめ文化・政治問題を取り上げた数々のドキュメンタリー番組を監督
1995	フィリピン・ディレクターズ・ギルド共同結成 『貴女のためにたたかう』福岡、東京、ニューデリー、上海、ダマスカス、カイロの映画祭に出品
1996	『マドンナ・アンド・チャイルド』香港、福岡、東京、カイロ、ダマスカスの映画祭に出品
1997	『ミラグロス』マヌヌリ映画批評家賞最優秀監督賞。福岡、東京、ハワイ、シンガポール、釜山の映画祭に出品
1998	『海に抱かれて』シンガポール国際映画祭で国際映画批評家連盟賞およびネットパック賞。ベルリン、モントリオール、福岡、東京、トロント、釜山、シカゴ、ロサンゼルス、ハワイ、テッサロニキ、カイロ、ブエノスアイレスの映画祭に出品
1999	『ホセ・リサール』メトロ・マニラ映画祭最優秀監督賞、マヌヌリ映画批評家賞最優秀監督賞、ファマス賞最優秀監督賞。ベルリン、ハワイ、シンガポール、福岡、東京、シカゴ、台北、ボンベイ、マドリードの映画祭に出品 ミュンヘン国際映画祭で回顧上映
2000	『ムロアミ』メトロ・マニラ映画祭最優秀監督賞、マヌヌリ映画批評家賞最優秀監督賞、ファマス賞最優秀監督賞。福岡、東京、ベルリン、シンガポール、釜山の映画祭に出品

主な監督作品

『鎖』(1980)
『ブルータル／暴行』(1980)
『モラル』(1983)
『ベビー・チナ』(1984)
『カルナル／愛の不条理』(1984)
『貴女のためにたたかう』(1995)
『マドンナ・アンド・チャイルド』(1996)
『ミラグロス』(1997)
『海に抱かれて』(1998)
『ホセ・リサール』(1998)
『ムロアミ』(1999)
『Bagong Buwan（New Moon)』(2001)

贈賞理由

マリルー・ディアス＝アバヤ監督は今日のフィリピンを代表する映画作家であり、アジアの重要な映画人のひとりとして国際的にも注目されている。とくに氏の近年の活動は、アジアフォーカス・福岡映画祭をつうじて福岡市民の大きな支持を受けて進展した。

1955年にケソン市に生まれたディアス＝アバヤ氏は、ロサンゼルスのロヨラ・メリーマウント大学とロンドン・インターナショナル・フィルム・スクールで映画を学び、1980年に第一作を発表して以来、フィリピン映画界の第一線の監督として作品を発表してきた。

初期の監督作品である『ブルータル／暴行』『カルナル／愛の不条理』『ベビー・チナ』などはマルコス政権時代の抑圧的な社会体制に対する痛烈な批判であり、巨匠リノ・ブロッカなどの作品とともにフィリピン映画の存在を広く世界に知らしめたものである。

1986年にマルコス政権が倒れ、続くアキノ政権時代、ディアス＝アバヤ氏は数年、映画界を離れ、社会問題や政治問題をとりあげるテレビ番組の制作にとりくみ、映像作家として社会改革につくした。フィリピンにおける民主主義の確立に貢献することは映画監督として出発以来の同氏の一貫した立場である。

1995年『貴女のためにたたかう』の発表からディアス＝アバヤ氏は再び映画監督として旺盛な活動をはじめる。『マドンナ・アンド・チャイルド』『海に抱かれて』『ホセ・リサール』『ムロアミ』などを次々と製作するが、そこにも社会の困難な諸問題を厳しく見つめて告発する姿勢が貫かれている。と同時に、苦しい状況の中で力強く生きぬく人たち、とくに下層の人びと、女性や子どもたちに対する愛情に満ちた表現は、いっそうその豊かさをまし、映画としてもさらにおおらかで人間的なぬくもりのあるものとなっている。

大作『ホセ・リサール』は、国民的英雄をひとりの人間、芸術家として、今までにない斬新な視点で描写した独創性と、格調高く描いた表現力により、芸術性に富んだ傑作として評価された。映画が娯楽として高い地位を保つフィリピンにおいて、このような作品が興行的にも大成功をおさめたことは、フィリピン映画の新しい時代の幕開けともなるものであろう。

ディアス＝アバヤ氏の作品が娯楽性と社会性と、さらには民族性との深い調和を保ちつつ、芸術作品としても高い水準を達成して国内はもとより国際的な評価も得ていることは、アジアの芸術文化のあるべき理想的なかたちである。それはまさしく「福岡アジア文化賞―芸術・文化賞」にふさわしい業績である。

公式行事スケジュール

行　事	日　時	場　所
○授　賞　式	9月13日（木） 午後2時～4時	アクロス福岡シンフォニーホール
○記　者　会　見	9月13日（木） 午後4時～5時	アクロス福岡606会議室
○祝　賀　会	9月13日（木） 午後6時～7時30分	ホテルニューオータニ博多 「芙蓉の間」
○市民フォーラム		
現代アジア経済セミナー 「経済開発における市場、国家および共同体」	9月14日（金） 午後2時～4時30分	福岡市役所15階講堂
アーティスト・トーク 「タワン・ダッチャニー　魂のメッセージ」	9月14日（金） 午後5時30分～7時30分	福岡アジア美術館アジアギャラリー
ディアス＝アバヤ、フィリピンを語る 「わたしが伝えたいもの―民衆とその社会」	9月15日（土・祝） 午後1時～3時	イムズホール
バングラデシュ 農村の新しい風 「マイクロ・クレジットと女性の自立」	9月15日（土・祝） 午後4時～6時30分	福岡市役所15階講堂
○絵画制作パフォーマンス 「タワン・ダッチャニー　響き合う、静と動」	9月15日（土・祝） ①午後2時30分～3時30分 ②午後4時～5時	エルガーラ・パサージュ広場
○受賞者フォーラム 「アジアの魂、豊かさへの挑戦」	9月16日（日） 午後1時30分～3時30分	イムズホール
○学　校　訪　問		
警固中学校 （芸術・文化賞受賞者 マリルー・ディアス＝アバヤ氏）	9月14日（金） 午前9時40分～午後1時	福岡市総合図書館 映像ホール・シネラ
福岡西陵高等学校 （大賞受賞者 ムハマド・ユヌス氏）	9月14日（金） 午後1時30分～3時	福岡西陵高等学校
愛宕浜小学校 （芸術・文化賞受賞者 タワン・ダッチャニー氏）	9月17日（月） 午前10時30分～午後1時	愛宕浜小学校
福翔高等学校 （学術研究賞受賞者 速水佑次郎氏）	9月17日（月） 午前11時～午後0時	福翔高等学校
○関連イベント		
特別展示 「タワン・ダッチャニー　せめぎあう光と闇」	8月9日（木） ～9月25日（火）	福岡アジア美術館アジアギャラリー(一部)
アジアフォーカス・福岡映画祭2001 受賞記念特別企画 「マリルー・ディアス＝アバヤ監督特集」	9月16日（日） ～23日（日・祝）	エルガーラ大ホールほか

授　賞　式

日　時：9月13日（木）午後2時～4時
会　場：アクロス福岡シンフォニーホール

2001年（第12回）福岡アジア文化賞授賞式は、受賞国大使館関係者をはじめ、留学生、国際交流団体、経済団体、大学や地域団体の代表者及び市民など約1,100名の参加を得て、福岡サロンオーケストラによる演奏の中、式典が厳かに始まった。

福岡アジア文化賞の創設の経緯を説明後、今回の受賞者のプロフィールや受賞にいたったこれまでの研究・芸術・文化活動の一端をビデオで紹介し、その業績を讃えた。その後、主催者代表挨拶、来賓による祝辞、選考経過報告と続き、主催者により賞の贈呈が行われた。4名の受賞者は受賞後のスピーチで喜びを表し、福岡市民や福岡に対するメッセージなどを語った。

また特別演奏として、現代箏曲の源流となる筑紫箏による演奏が披露され、式典にいろどりを添えた。

受賞者挨拶

ムハマド・ユヌス

このような栄誉をいただき誠に光栄に存じます。私たちの活動を認めてくださったことを大変うれしく思います。今後の私たちの使命を続けていくうえで大きな励みとなることでしょう。

1976年に、貧しい人々が高利貸しからお金を借りずにすめばと思った私は、42人に自分のお金を27ドル貸しました。そのお金を受け取った人々は大喜びでした。こんなわずかな金額でこれほど多くの人をこれほど幸せにできるなんて、なんとたやすいことかを目にし、恒久的に彼らがお金を手に入れられる方法を考えなければと思いました。そこで銀行に行き、彼らにお金を貸してほしいと頼みました。銀行は、貧しい人々は担保になる物が何もないから融資はできないと言ったのです。

私は銀行の言うことが本当かどうか自分で確かめるべきだと考えました。自ら保証人になり、貧しい人のために銀行から融資を受け、そのお金を彼らに貸すという単純な方法を試みました。うまくいきました。だれもが自分の借りたお金をきちんと返済したのです。

この出来事からその後のすべての実験が始まりました。私は、１つの村で貧しい人にわずかなお金を貸すことから始め、その村の数を５つ、それから20、50、100へと増やしました。すべてうまくいきました。それでも銀行は考えを変えようとはしませんでした。

1983年に、ついに自分たちで銀行をつくりました。今、私たちはバングラデシュの４万の村で、240万の人々に融資をしています。その95パーセントが女性です。

私たちは、自分たちや他の人々の考えをもとに組織や方針をつくります。我々の周りにいつも貧しい人々がいるという事実を念頭におきます。そう、貧しい人々がいるのです。もし、人類が本当に、貧困は受け入れられるべきではなく、文明社会にあるべきものではないと確固たる信念をもっていたら、貧困のない世界をつくるために必要な機関をつくり、政策をたててきたことでしょう。人間は月に行きたいと思い、月に行きました。お互いのコミュニケーションを瞬時に行いたいと思い、通信技術に改良を加え高速通信を実現しました。人間は自分たちのやりたいことを達成してきたのです。

もし、何かを成し遂げていないなら、それを成し遂げようとする思いの強さが不足していたからだと考えます。

私は、貧困なき世界をつくろうと思えば実現は可能だと信じてやみません。この世のだれ一人、貧困者として扱われない世界をつくることができるのです。そこでは、貧困は博物館の中でしか目にしないものになります。子どもたちは貧困博物館に行き、そこで人間の惨めで非人間的な姿を見て恐れおののくことでしょう。そしてこれほど数多くの人々が貧困にあえいでいたのに、何もせずただ手をこまねいてきた、自分たちの親やそのまた親の責任を追及することでしょう。

私は、いつも貧困の解消には、方法や手段を見いだすことよりも、心の問題が大きく左右すると考えます。今でさえ、私たちは貧困の問題を直視しようとはしません。貧しい人々はもっと働きさえすれば貧困から脱却できるというだけで、この問題に踏み込もうとしないのです。

人々は貧者に手を伸ばすときには慈善（チャリティー）を与えようとしますが、ほとんどの場合、その慈善は、問題を直視して解決の道をさぐる努力を避ける窓口でしかありません。慈善を口実に責任を逃れているにすぎないのです。

慈善は貧困解決の道ではなく、自ら何かを行うというイニシアチブを貧者から奪うことになり、貧困は永久に貧困のまま残ってしまいます。私たちは、慈善さえ施せば他人の生活を心配せずにいられると考えますが、それでは、私たちの良心は生かされていないのです。

この賞をいただいたことに感謝します。私を賞に選ぶことで、自分たちとその子どもたちが威厳をもって生きることができるよう、一生懸命働こうと意気込む世界中の何百万の人々を一緒に誉めたたえてくださっていることになるのです。

速水　佑次郎

このたび、「福岡アジア文化賞」を授与されましたこと、身にあまる光栄です。特に「アジア」を冠する賞をいただきましたことは、過去30年にわたってアジアの村や町を研究の場としてきました私にとりましてなによりもうれしいことであります。

私が、アジアの農村と本格的に取り組むようになりましたのは、今から30年近く前になりますが、1974年にフィリピンの国際稲研究所（IRRI）に研究員として赴任してからです。赴任してからすぐ始めたのが、農家経済調査、つまり農家に農業生産と家計の諸活動を記録してもらい、その資料に基づいて農村の実態を把握しようとする研究です。

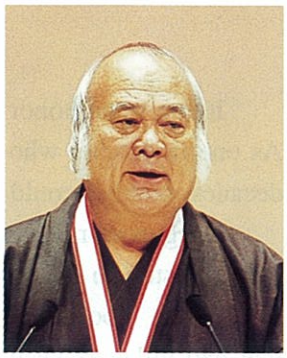
この研究のため、フィリピン第一の湖であるラグナ湖のほとりの一農村を選び、そこに２年間通いつめました。そこで見たのは、途上国の農民に対する既存のイメージを打ちやぶるものでした。先進国の人間は、途上国の農民といえば、迷信や慣習にとらわれ、合理的な思考に欠け、新しい技術を取り入れようとしない。また、怠け者でヤシの木陰で昼寝ばかりしているなどと想像しがちです。

しかし実際に私が見たのは、農民たちは貧しいなりに新品種や化学肥料などの近代的投入を取り入れ、きわめて合理的な経済計算の下に生活を維持、向上させようとしている姿でした。だが、彼らの合理的な努力にもかかわらず、農民たちは大変貧しい。なぜかといえば、一方では人々が急激に増え、一人当たりの耕地がどんどん減っていきます。他方、個々の農民の努力を生かすために必要な灌漑や道路などの基盤は乏しく、農地制度や金融組織、税制など国家の仕組みの多くが貧しい農民や中小の商工業者を助けるどころか彼らの発展を阻害するように働いているからです。

個々の村人の私利追求活動と、村社会での協力と、国家の支援とをどう組み合わせて貧しさからの脱出を図るべきか。この問題を考えあぐねるうちに経済発展における市場、共同体、国家という三つの組織の役割はどうあるべきかという終生の研究テーマが形成されたのです。それからの私はアジアの各地で、あるいはジャワの棚田で雨に濡れながら、あるいはデカン高原で灼熱の太陽に焼かれながら、考え続けてまいりました。

こうして、私の研究はアジアの村々、町々で出会った多くの人々によってはぐくまれ、育てられてきました。いま受賞の栄に浴するにあたり、これらの方々に対し深い感謝をささげたいと思います。

ありがとうございました。



タワン・ダッチャニー

自分の愛情を目に見える形で表現することが私の仕事です。正しい心で、自分のもちうる知識を駆使し、仏教哲学の中にある真実をしっかり見つめ、全身全霊をかけて、作品に向かいます。私は自分の夢に気持ちを集中させることで、つくった作品が純粋で、透明で、美しい光を放ち、ジャスミンの甘い香りが宇宙にひろがるように仕上がっていくのです。

作品に接しているときはいつも、御仏に抱かれた霧にけむる寺院で、御仏のすぐ近くにいるような至福の喜びと満ち足りた気持ちを覚えます。虹が美しい色を放つように、そして色とりどりの花でつくった花輪の美しい色がかもし出すように、私は自分の作品を通して御仏に触れるのです。

御仏は愛情にあふれた陽の光で私を包み、そして自由の灯をともしてくれます。美や真実を求める私の気持ちに、美的感覚や哲学が融合し、何か美しい物をつくりたい、そしてつくれたとき、私はたとえようのない心の平和と幸福で満たされるのです。

作品をつくってきたこれまでの私の人生は、いつも報酬を得るという形で報われてきました。このことをうれしく思い、感激の気持ちでいっぱいです。そして、今は、愛情という究極の価値を皆様にわかってもらいたいと思っているところです。

皆様からのこの栄誉ある賞は私に大きな喜びをくださいました。私は言葉に表せないほどの大きな創作の喜びの流れに飛び込み、天の川に輝く星の一つになったような気持ちです。

私に愛情を示していただき、私を理解していただき、そして私を認めていただいたことに感謝します。この賞がきっと東洋の文明、芸術、文化の時代を固くつなぐものになると思います。そして、世界中の友情、美、平和を求める知恵の炎となってこの先ずっと燃え続けることでしょう。

最後に、皆様は、私が完璧な人間ではないことをご存じですが、そんな私にこれほどの愛情を注ぎこの場に立たせてくださいました。

ありがとうございました。

マリルー・ディアス＝アバヤ

福岡の皆様と福岡市からこの賞をいただき大変光栄です。この栄誉は私だけでなく、私の国に対して授与されたものだと考えます。フィリピンは、アジアの中でも、とりわけ文化の多様性に富むという特徴があります。それは東洋と西洋の影響が融合する中から生まれたもの、古くからの固有のもの、そして植民地時代から受け継いできたものです。21世紀、フィリピンが自らの文化を見つめ続けていく中で、この文化の発展を最もよく、そして最も国民に支持される形で表現できるものこそがビジュアルアートや映画であると思います。

7,000を超える島に、80もの異なる言葉を話す人々が暮らすフィリピンのような国では、国全体としてのまとまりや平和、繁栄などが、国民の目に映りにくいものです。リージョナリズム、つまり地域主義がフィリピン全体の文化の発展を妨げてきたと言われていますが、人々が（我々が）最も好む娯楽であり、文化交流の手段であるフィリピン生まれの映画は、フィリピノ語が、フィリピンの国の言葉として、そして共通語として発達するためになくてはならないものだったのです。映画の中で語られる言葉を通して、我々のもつ様々な文化が意義のある方向に融合されることが望まれます。

フィリピンが今日抱える大きな問題の一つに、フィリピン南部のミンダナオ島で何世紀も続くキリスト教徒とイスラム教徒との対立があります。イスラム教徒は独自の宗教や文化を盾に民族自決権を主張しています。国民の90パーセント以上がカトリック教徒であるフィリピンでは、少数派に属するイスラム教徒は社会的に不当な扱いを受けやすい立場にあるのです。過去600年間、何十万もの兵士、反対派、キリスト教徒、イスラム教徒、そしてフィリピンに古くから住んできた人々がこの独立を求める戦いの犠牲になってきました。なによりも危惧されるのは、人の命だけでなく、先史時代から受け継いできたフィリピンの貴重な遺産までもが戦争の犠牲になったということです。ですから、この戦いを平和に、そして永遠に解決することがぜひとも必要なのです。

私は、フィリピンのイスラム教徒とキリスト教徒が真に歩み寄るための第一歩は、お互いの文化の価値を認めあうことだと信じます。ですから今回、この対立によるミンダナオ島での戦争を、新しい映画のテーマに選びました。映画を通して、文化というものがフィリピンだけでなく、世界中の平和を求める対話に欠かせない役割を担っていることを表現したいのです。

先端技術とグローバリゼーションの時代にあって、人々の心は今まで以上に自分の文化のルーツに心の安らぎを求め、愛着を感じています。ここ福岡には、21世紀を生きていくための素晴らしい環境があります。福岡は国際的な商業活動が活発な港というだけではなく、アジアの文化と芸術の聖域でもあるのです。毎年９月に開催されるアジア・マンスがまさしくそれです。特にアジアフォーカス・福岡映画祭は、私に多様なアジアの文化の素晴らしさをより深く理解する機会を与えてくれました。

映画製作にかかわる一人として、今回、フィリピン人の魂を大きなスクリーンで表現したいという新しいインスピレーションを与えていただいたことに感謝します。そして、フィリピン映画がアジアに生きるすべての人々の発展に大きく貢献できるよう心から願っています。

フィリピンには「マブハイ」、「幸多かれ」という意味の言葉があります。ここに、私とともに賞を受けたムハマド・ユヌス氏、速水佑次郎氏、タワン・ダッチャニー氏、そして福岡、アジアのすべての人々に心を込めて「マブハイ」の言葉を贈ります。

受賞者フォーラム

日　時：９月16日（日）午後１時30分～３時30分
会　場：イムズホール
参加者：約300名

１　テーマ　「アジアの魂、豊かさへの挑戦」
２　出演者　大賞受賞者　ムハマド・ユヌス
　　学術研究賞受賞者　速水　佑次郎
　　芸術・文化賞受賞者　タワン・ダッチャニー
　　芸術・文化賞受賞者　マリルー・ディアス＝アバヤ
　　コーディネーター：福岡市女性センター館長　野口　郁子
３　概　要

公式行事の最後を飾り、４人の受賞者が一堂に会して自由に語り合う受賞者フォーラムが開催された。

まず、子ども時代や、今の道へ進んだきっかけなどが語られた。教育熱心な家に育ち、10代の頃、世界各地を訪問する機会に恵まれたユヌス氏。母国独立に、米国での職を捨て帰国したが、貧困や飢餓で死んでいく人々を前に、自らの学問が何も役立たないと知り、それが無担保小口貸付創始のきっかけになったと経緯を紹介した。少年時代から好奇心旺盛だった速水氏は、貧困から急速に経済成長した日本のような国々と、一生懸命働いても貧しいままの国々との違いがなぜあるのかという疑問に行き当たり、今なお考え続けていると話した。幼い頃から驚くほど絵がうまかったというタワン氏は、ヨーロッパ各国で絵を学ぶが、模倣ではない、タイのタワンでありたいとの思いから独自の表現方法をつくり上げたという。フィリピン独立の数年後に生まれ、厳しいカトリック学校で青春を過ごしたアバヤ氏。両親に守られ、安全で快適なのになぜか不安を感じていた現実生活から逃れ、非現実の世界に安らぎを求めたことが、映画の世界に入ったきっかけであったと語った。

“アジアの魂”について、「西洋から学んだのはテクニックだけ。ヨーロッパにいても、自分の文化はしっかりもっていた」とタワン氏。アバヤ氏は「アジアの文化は因果応報的な輪の文化で、直感的。映画もニュアンスのように見えないものを表現する。そこにアジアの文化の独自性がある」と述べた。

“豊かさ”に関してユヌス氏は「貧困は貧しい人たちに原因があるのではなく、私たちが築いてきた環境、制度、文化が生み出したもの。貧困の解決のために、西洋を無条件に模倣したことは間違いであった。模倣で見失った自らの魂と自らの解決策を見出す努力が必要」と語った。日本の未来についての会場からの質問に、速水氏は「人々が喜びと誇りをもって働けるようなシステムづくりが一番大事である」とし、人々の行動様式を、組織づくりにいかに効果的に使うかが今後の発展を決めると答えた。

また、豊かな社会を築くために、アバヤ氏は「心から他人を思いやり、平和、素朴さ、精神性を重んじる文化に戻ろう」と提言、ユヌス氏は「若い世代が自ら将来の世界をデザインしてほしい。希望をもって努力すれば必ず実現する」と、若者へ期待を込めて力強く語った。

最後に野口氏が「お互いに理解しあうことが大事。豊かな社会の実現に向け、アジアや世界の人々と交流できる福岡で、私たちは日々努力をしなければならない」と、フォーラムを締めくくった。

バングラデシュ 農村の新しい風

日　時：９月15日（土・祝）午後４時～６時30分
会　場：福岡市役所15階講堂
参加者：約250名

１　テーマ　　「マイクロ・クレジットと女性の自立」
２　プログラム
　趣旨説明　滋賀県立大学人間文化学部教授　　應地　利明
　トーク
　　出演　　福岡アジア文化賞大賞受賞者　　ムハマド・ユヌス
　　名古屋大学大学院国際開発研究科助教授　伊東　早苗
　　バングラデシュと手をつなぐ会事務局長　宇治　松枝
　　コーディネーター　　應地　利明
３　概　要

女性を中心に多くの市民、学生、研究者、NGO関係者で埋め尽くされた会場は、ユヌス氏の強い信念と情熱に満ちた言葉に、終始熱気に包まれていた。

はじめに應地氏が、ユヌス氏の活動がバングラデシュの女性を自立させ、新しい社会の変化を生み出していること、学術研究賞の内容を社会活動の分野まで広げた初めての受賞者であることなどを紹介した。

第一部は、まずユヌス氏が、バングラデシュの独立後、人々が飢きんに苦しみ死んでいくのを目の当たりにし、無担保の小口貸付を行う貧しい農村女性のための銀行を設立したこと、その活動がバングラデシュ全土へ広がっていったことなど、グラミン銀行創設の経緯と目的を語った。

医療と教育を中心にバングラデシュで支援活動をしている宇治氏は、グラミン銀行の活動が、男性優位の社会で、厳しい立場におかれている女性たちに自立の力を与えるきっかけになったと評価。現地での調査経験がある伊東氏は、農村に行こうともしない政府の役人に比べ、１～２時間も歩かなければ行けない村に、雨でも嵐でも毎日訪問する銀行スタッフの意識の高さに感動したことを語った。また、ユヌス氏は会場からの質問に答え、貸付を受けた女性が創意工夫してビジネスを創出する姿や、乳幼児の死亡率が低下し、人口増加率も低下するといった社会変化が起こっていること、そして、就学率の向上など、プログラムが次の世代を重視したものとなっていることなどを紹介した。

第二部は、ユヌス氏が、世界各地に広がっていった活動の経緯を述べ、世界の半数の人が１日２ドル以下の生活を余儀なくされている今日、銀行を利用できない貧しい人々の創造力をどのように経済に生かしていくかが、我々のチャレンジであるとして、グラミン銀行の現状と問題点を示した。

伊東氏は、グラミン銀行がパイオニアとしての役割を果たしたことにより、貧しい人にも金融サービスを提供する動きが世界に広がっていると、その成果を称えた。これからの取り組みについての質問にユヌス氏は、グラミン銀行はマイクロ・クレジットプログラムの初期の段階であり改善する点も多い、今後、信頼性や効率性を高めながら少しずつプログラムを進めたいと答えた。

最後に、應地氏が「この新しい金融システムは、人間が希望や意欲をもって生きることの大切さを知るユヌス氏が熱情をこめて創始したもの。今日は、ユヌス氏の人間的な大きさや温かさを熱風として感じた」と感動の気持ちを表し、フォーラムを締めくくった。

ムハマド・ユヌス氏
Professor Muhammad Yunus

伊東早苗氏
Professor Ito Sanae

宇治松枝氏
Ms. Uji Matsue

應地利明氏
Professor Oji Toshiaki

現代アジア経済セミナー

日　時：９月14日（金）午後２時～４時30分
会　場：福岡市役所15階講堂
参加者：約200名

１　テーマ　　「経済開発における市場、国家および共同体」
２　プログラム
　　趣旨説明　東京大学社会科学研究所教授　　末廣　昭
　　基調講演　福岡アジア文化賞学術研究賞受賞者　速水　佑次郎
　　パネルディスカッション
　　パネリスト　　速水　佑次郎
　　東京大学東洋文化研究所所長　　原　洋之介
　　コーディネーター　　末廣　昭
３　概　要

末廣氏は趣旨説明の中で、自らのタイでの研究を例に「今のアジア経済は、単なる市場任せや政府の介入だけではなかなかうまくいかない」と述べたうえで、新たに「共同体」の役割に着目した速水氏の考えを野心的な試みとして紹介した。

基調講演で速水氏は、まず民間財と公共財を例に、市場と国家の役割を述べ、経済活動を制御するもう１つのシステムとして顔が見える「共同体」の重要性を主張した。「市場が競争、国家が強制であるならば、共同体は協力のメカニズムである」「３つの要素はそれぞれ補完しあい、各ウエイトは経済発展の度合いや文化に関係する」と説いた。また、欧米と日本の罪と恥の文化の違いを示したルース・ベネディクトの『菊と刀』を引用しながら、恥の文化である日本は共同体に軸足を置いた経済システムであった点を指摘。今後もそれでいいのかという問いを投げかけて講演を終えた。

ディスカッションで原氏は、世界銀行の開発への考え方の変遷を追いながら、国家と市場以外の要素についての認識が次第に出てきたこと、文化も含めた共同体の視点が今後重要であるのではないかとの見解を示し、速水氏の理論を強く支持した。

会場からの、共同体の負の側面に関する質問に速水氏は、「競争のない社会では、共同体がモラルの低下や談合といった腐敗の源泉になる」と述べ、市場・国家・共同体がバランスよく相互の役割分担を果たす大切さを強調した。

会社共同体が崩れつつある日本で、今何が求められているかという議論で原氏は、「共同体の行方については、生きる意味などの非経済的な価値をどこに置いているかという問題抜きには考えられない。」とし、速水氏は「共同体中心の協調から、新しい協力関係が含まれた競争メカニズムに軸足を移し、それをうまくデザインできるか否かが日本の将来を決定するだろう」と述べた。長期のバランスと多元的なバランスをとるという、共同体が持つ仕組みに関する議論では、両氏とも家族や地域社会の関係を新しく築き直す必要性を、また、グローバル化と国や民族のあり方をめぐる議論では、国を超えた、地域としてのアジアとのつながりを、日本そして福岡が深める重要性を強調した。

最後に末廣氏が「競争と自由の大切さが増す反面、信頼と安心が失われてきている。解決のヒントはアジアにあり、それを知る今回のような催しは非常に貴重」とフォーラムの意義を述べ、締めくくった。

速水佑次郎氏
Professor Hayami Yujiro

原　洋之介氏
Professor Hara Yonosuke

末廣　昭氏
Professor Suehiro Akira

アーティスト・トーク

日　時：９月14日（金）午後５時30分～７時10分
会　場：福岡アジア美術館アジアギャラリー
参加者：約100名

1　テーマ　「タワン・ダッチャニー　魂のメッセージ」

2　プログラム
　トーク　福岡アジア文化賞芸術・文化賞受賞者　タワン・ダッチャニー
　質疑応答

3　概　要

過去、福岡で個展を行ったことがあるタワン氏は、今回の受賞記念の特別展示会場に詰めかけた市民を前に、友人と再会できたと、ユーモアたっぷりに喜びを表現し、トークを始めた。

タワン氏は、21歳のときの作品『崇拝』、35歳のときの『創造』、人間の罪を表現した『未来』の３点をそれぞれ解説し、「私は愛と信念をもって描き続けている。その愛はキャンバスの上に表れている。世界を愛するから、自然にあるもの、形あるものを描く。だから細部の説明は必要ない。作品に怒りや力強さが表されていたとしても、その中には必ず寂しさがある」と語った。

次に、会場からの質問を積極的に受け、一つ一つ丁寧に答えた。『ニミ・ジャータカ』の精密な手法については、「ボールペンによる作品で、仏教哲学を現代風に表現。細密な絵を描くのは集中力を高めるために」と説明。『崇拝』に描かれた日食については、かつて経験した半年に２度の日食とその２度目の瞬間に訪れた母親の死にふれ、「自然界の中で一番パワフルで、私たちを不安な気持ちにさせる唯一の出来事ではないか」と感慨を述べるとともに、芸術家にはインスピレーション、すなわち感覚的、ミステリアスなものが必要であると語った。山岳民族が多いチエンラーイで生まれ育ったことによる作品への影響については、「チエンラーイは少なくとも30の民族が混在する国際的なところ。彼らの服装、言葉、生活様式、狩猟の仕方などからたくさんの影響を受けている」と答えた。カラフルな画風から白と黒の世界へと変化したことについては、「年を重ねいろいろな考え方が自分の中で煮詰まってくると、世界中が白と黒にしか見えなくなってきた」とその心情を語り、氏の作品は心の目で見てほしいと訴えた。

会場に展示された自宅の写真や、当日の衣装などにまで説明がおよび、服装や生活様式など日常生活においても独創性を追求する氏の姿を垣間見ることができた。また福岡の印象を聞かれて、「いつまでも魂の中で響き続ける初恋の気持ち」と答え、福岡の街と人々に対する好意を表した。

会場の人々に「愛」というメッセージを残したトークは、「作品の細部を解説するよりも、お互いの心にふれあうことに意味がある」と主張するタワン氏らしい内容となった。

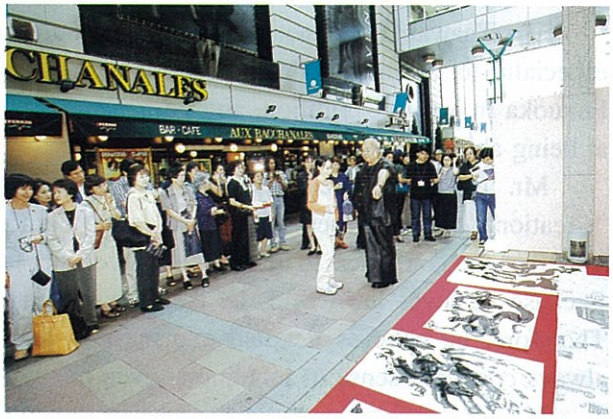
終了後もタワン氏は、参加した市民との記念撮影や握手などに気軽に応じ、質問にも丁寧に答えるなど、和やかな交流はいつまでも続いた。

絵画制作パフォーマンス「タワン・ダッチャニー　響き合う、静と動」

日　時：９月15日（土・祝）午後２時30分～３時30分、午後４時～５時
場　所：エルガーラ・パサージュ広場
参加者：約500名

芸術・文化賞受賞者タワン・ダッチャニー氏による絵画制作実演が披露された。

タワン氏は筆を巧みに使い、瞑想とひらめきを、紙の白と墨の黒で一瞬のうちに表現した。その躍動感あふれる作品の数々に、驚きの声が上がり、質問が飛び出すなど、終始和やかに行われた。



福岡アジア文化賞受賞記念
特別展示「タワン・ダッチャニー　せめぎあう光と闇」

期　間：８月９日（木）～９月25日（火）
場　所：福岡アジア美術館アジアギャラリー（一部）
入場者：5,368名

タワン・ダッチャニー氏の受賞を記念し、氏のこれまでの活動を紹介する特別展示を、公式行事に先駆けて開催した。初期作品から近作までを含む今回の展示は、日本国内では初めての氏の回顧展的な紹介となった。

＊展示内容　タワン・ダッチャニー作絵画10点および記録写真（パネル）等

ディアス＝アバヤ、フィリピンを語る

日　時：９月15日（土・祝）午後１時～３時
会　場：イムズホール
参加者：約230名

１　テーマ　「わたしが伝えたいもの－民衆とその社会」
２　プログラム

趣旨説明	映画評論家	佐藤　忠男
トーク		
	福岡アジア文化賞芸術・文化賞受賞者	マリルー・ディアス＝アバヤ
コメンテーター	九州大学大学院比較社会文化研究院教授	清水　展
コーディネーター		佐藤　忠男

３　概　要

佐藤氏はディアス＝アバヤ氏を紹介し、貧困、児童労働、出稼ぎなどのフィリピンの厳しい現実を描いた氏の作品には強烈な社会批判が込められている、しかし、否定されるべき人物も人間として魅力的に表現され、社会全体や人間そのものが豊かに描かれていると、その作品の素晴らしさを語った。

ディアス＝アバヤ氏は、学校や家庭で英語が会話に使用される環境で育ち、さらに欧米で映画を学び、西洋の影響を受けていく中で、自国文化に強い疎外感を感じるようになったこと、映画製作をはじめたときフィリピンのことを何もわかっていない自分に気づき、英語をやめフィリピノ語を使うようにしたことなど、西洋と自国の文化の狭間で揺れ動いた自らの心情を語り、それがフィリピンの歴史的経験の反映でもあると説いた。多様な文化や言語があり、国の概念や統一的な文化が形成しにくかったフィリピンを、スペインがキリスト教で一つにまとめ、今も精神面に深い影響を与えている。後のアメリカ支配は、英語と民主主義、資本主義の繁栄をもたらしたが、相矛盾したさまざまな文化の影響が、フィリピン人のアイデンティティや文化を探る試練となっていると指摘した。

次に、最近の映画製作の話題に絡めながら、漁師たちや子どもたちと仕事をするうちに、人々は貧しいほど親切で、生活が素朴であるほど心豊かな生き方をしていることを知ったと語った。

さらに、初めて見たイラン映画で、結婚や教育など、イランの人たちが自分たちと同じ心配をしていることを理解したことにふれながら、600年以上にもわたるフィリピンでのイスラム教徒とキリスト教徒との闘いを題材とした製作中の作品への思いを述べ、アメリカのテロ事件にも言及して「映画は単なる娯楽にとどまらず、平和交渉に使われる言葉にもなりうるのではないか」と、映画のもつ力について熱っぽく語った。

清水氏は、貧しく弱い人たちに焦点を当てながら、貧困や社会の不正義、抑圧の問題を取り上げている氏の作品は、娯楽映画であると同時に、社会の現実へ眼差しを注ぐ映画であると、その魅力を語った。また、日本との人的交流の強さを強調、日本人がフィリピンを理解する意義と重要性を力説した。

最後にディアス＝アバヤ氏は「人生は生きるに値すると訴える希望の映画をつくっていきたい」と抱負を述べた。さらに、新たな課題に直面している日本人へ、富の減少はかえって質の高いより人間的な生活をしていく素晴らしいチャンスになるのではとアドバイスをして、話を締めくくった。会場からは感謝の言葉が数多く寄せられ、感動に包まれたまま、フォーラムは幕を閉じた。

マリルー・ディアス＝アバヤ氏
Ms. Marilou Diaz-Abaya

清水　展氏
Professor Shimizu Hiromu

佐藤忠男氏
Mr. Sato Tadao

アジアフォーカス・福岡映画祭2001
受賞記念特別企画「マリルー・ディアス＝アバヤ監督特集」

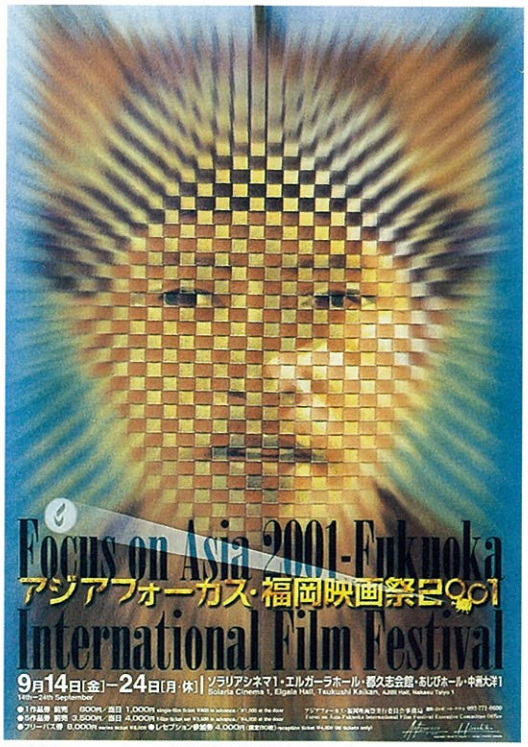
期　間：９月16日（日）～23日（日・祝）
会　場：エルガーラ大ホール、ソラリアシネマ

マリルー・ディアス＝アバヤ氏の受賞を記念して、アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会の主催により、代表作７作品を上映した。

上映スケジュール

９月16日（日）	19：00	カルナル／愛の不条理
17日（月）	16：00	海に抱かれて
19日（水）	10：30	ムロアミ
20日（木）	10：30	ミラグロス
21日（金）	10：30	貴女のためにたたかう
	16：00	マドンナ・アンド・チャイルド
22日（土）	11：30	ホセ・リサール
23日（日・祝）	10：30	カルナル／愛の不条理

アジアフォーカス・福岡映画祭2001パネルの前で
In front of the "Focus on Asia - Fukuoka International Film Festival" panel



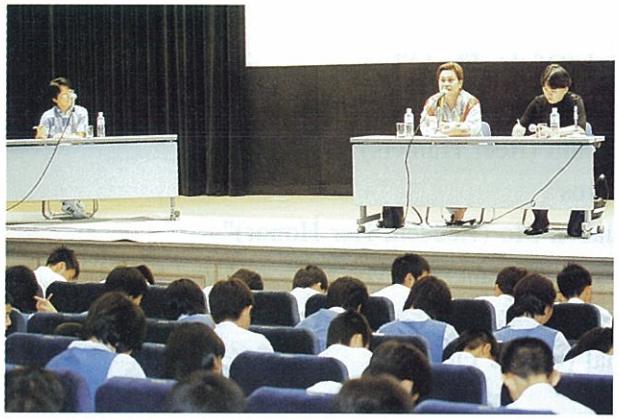
アジアフォーカス・福岡映画祭2001ポスター
Poster of the "Focus on Asia - Fukuoka International Film Festival"

学校訪問

＜警固中学校＞

日　時：９月14日（金）午前９時40分～午後１時
会　場：福岡市総合図書館映像ホール・シネラ

１、２年生約220人が、マリルー・ディアス＝アバヤ氏の監督作品『マドンナ・アンド・チャイルド』を鑑賞、会場は感動の余韻に包まれた。続いて氏からフィリピンの社会、家族のあり方や子どもたちの現状が紹介され、家族の絆や愛情の大切さが語られると、生徒からも感想や質問が積極的に寄せられた。最後にディアス＝アバヤ氏から「広い心と強い心で新しいものを生みだす創造力をもって生きていってほしい」と力強いメッセージが送られた。



＜福岡西陵高等学校＞

日　時：９月14日（金）午後１時30分～３時

ムハマド・ユヌス氏は、１、３年生約800名を前に「農村の新しい風、マイクロ・クレジットと女性の自立」をテーマにバングラデシュの現状と、グラミン銀行を設立した経緯、さらには貧困根絶を目指すプロジェクトなどについてわかりやすく語った。氏の情熱と「世界から貧困をなくすことは可能である」という力強い言葉に感動した生徒たちからは、講演後、多くの質問や感想が述べられた。

＜愛宕浜小学校＞

日　時：９月17日（月）午前10時30分～午後１時

歌とリコーダーの演奏で明るく出迎えた５年生約100名を前に、タワン・ダッチャニー氏は絵画制作を披露した。氏の穏やかな語らいとともに、リクエストに応じて次から次に躍動感あふれる象や牛が描き出されると、児童たちからは驚きと興奮の声があがった。絵画制作の終了後は氏を囲み一緒に給食を楽しむなど、終始にぎやかな交流が行われた。

＜福翔高等学校＞

日　時：９月17日（月）午前11時～午後０時

速水佑次郎氏は１年生約320人を前に、「世界を貧しさから解放するには」というタイトルで、世界に数多くある貧困にあえぐ国々の現実と課題について講演を行った。なぜある国は貧しくて、なぜある国は金持ちなのか。開発経済学の基本テーマをわかりやすく語りながら、その貧困を克服する知恵と日本の役割などについて、生徒と一緒に考える時間をもった。